

藤女子大学人間生活学部紀要, 第 50 号: 73-87. 平成 25 年.

The Bulletin of The Faculty of Human Life Sciences, Fuji Women's University, No. 50: 73-87. 2013.

「キリスト教保育」の開設と保育学科生の意識

— 子どもに伝えたい聖書の言葉の分析から —

吾 田 富士子 大 長 司

Abstract

In this study, we reviewed the history of the Department of Early Childhood Care and Education up to the initiation of the course on “Early Childhood Christian Education” as well as the role that the course has played.

We also conducted a survey among students on the phrases from the Bible they would like to pass on to children in the future. The survey results revealed that the students chose phrases that they feel they were moved or encouraged by as well as the phrases that they felt provided guiding principles for life. This indicates that, rather than an understanding of the existence of God or the Christian doctrine, the students' understanding of Christianity comes through a simple sense of the appreciation and prayers that they experience in their daily lives.

The most noteworthy result from the survey is that fact that the students are encouraged and saved by these phrases from the Bible and they try to face their difficulties and strive to live as best as they possibly can. Students form their character and grow through the experience of overcoming difficulties in life, and the contemplation of these experiences helps them develop skills with which to aid children form their own characters.

1. はじめに

本学は開学以来、カトリック精神に基づくキリスト教的世界観や人間観を土台とした教育を行ってきた。現在、本学共通科目には「キリスト教教学」（1 年前期必修）、「人間学概論」（1 年前期必修）、「聖書学概論」（1 年後期必修）、「聖書学（旧約）」（2 年前期選択）、「聖書学（新約）」（2 年後期選択）のカトリック関連科目が設置され、クリスマス行事等教科目内外でカトリック精神基盤の教育を行ってきている。

保育学科においても、短期大学保育科開設時から、カトリック精神を基盤とした保育者養成を行ってきている。日本における幼稚園開設と保育者養成は、海外の教会から派遣された女性宣教師やシスターの果たした役割が大きく、明治から昭和初期にかけてのミッション系高等女学校の設立と連動している。本学園も 1925 年の札幌藤高等女

学校開設以後、1934 年に小樽マリア幼稚園（現小樽藤幼稚園）、1938 年に札幌に藤幼稚園を開設している。本学短期大学は国文科、英文科、家政科の 3 学科体制で、1950 年に藤女子専門学校から移行した。1954 年の保育学科開設時には、藤幼稚園の初代保育者のレニルデ・シュレーデル、太田妙を学科専任教員に加え、専門科目群にもカトリック関連科目が必修として設置されていた。また、本学独自の教育実習・保育実習を、藤幼稚園及び本学関連社会福祉法人のカトリック精神を基盤とした羊丘藤保育園の協力により、今日まで全学生が履修する体制で設置してきていることも本学科の特色となっている。

しかし、専門科目群の増大と共に本学科独自の専門科目を削減せざるを得ない状況のなか、学科独自の実習の意義やカリキュラムを問い直す必要に迫られた。また、1997 年、当時の理事長宇山銈子の退職を境に学科内にシスターが不在となり、

Fujiko AZUTA 藤女子大学人間生活学部保育学科
Tukasa DAICHO 学校法人旭川カトリック学園羽幌藤幼稚園

本学科の教育理念の確認やカリキュラムの再構築作業の中で、保育専門科目として「キリスト教保育」を新設し、カトリック保育関係者とプロテスタント保育関係者の協力を得ながら、2006年度より必修として展開している。

本論は、学科の開設時から「キリスト教保育」開設までの経緯を概観し、「キリスト教保育」受講学生のレポート分析から、キリスト教や聖書に対する学生の姿勢や、学生自身の人間性と向き合う姿を明らかにしながら子どもの人間形成を支えるために必要な人間としての基盤を探る。

2. 短大保育科開設とキリスト教教育

2-1 保育者不足とキリスト教保育者養成校

1950年代の日本は、幼稚園は急増していたが、幼稚園教諭が不足しており、保育者養成は急務の課題であった。特に1949年施行の「教育職員免許法」及び「同施行令」「同施行規則」により有資格者による保育が必要となったが、免許状を授与する課程認定大学が不足しており、多くの幼稚園が無資格者で保育を担わざるを得なかった。

北海道においても、状況は変わらず、1950年当時、札幌7園を含む全道24幼稚園で働く保育者の80%以上が無資格者であった。

当時の北海道の保育者養成校は、1935年に開設された北星女学校保育専攻科のみであったが、教育基本法と学校教育法の制定による女子専門学校廃止に伴って、1947年より生徒募集停止の状態にあった¹⁾。

また、当時の全道25幼稚園のうち、プロテスタント系10園、カトリック系6園、仏教系6園の状況にあり²⁾、北星女学校は、1954年、無資格教員のための現職教育教員養成機関として、就業期間1年の保育者養成にあたった。現職者が学びやすいよう夜間課程として開設され、後に北星学園幼稚園教諭・保母養成所と名称変更して養成に努めてきたが、1988年に閉校となった。

本学園でも、当時既に複数の幼稚園を開設、保育学科開設は猶予が許されない状況にあった³⁾。

2-2 保育科開設時：職業教育とリベラル・アーツ

本学園では1947年に設立した藤女子専門学校を土台に、1950年よりリベラル・アーツを中心とした人間育成を主眼に英文科、国文科、家政科各

科50名定員の北海道内第1号の短期大学が既に発足していた。しかし、そこに職業教育を主眼とした保育科を設置するにあたっては慎重な検討が重ねられた。特に、専門学校設立以来育ててきた学風に、異色の保育学科がなじむのか、との議論が沸き起こり、検討が重ねられた⁴⁾。この職業教育と本学園のリベラル・アーツ中心のカリキュラム構成との融合が保育科カリキュラム編成の課題となった。

2-3 保育科開設時の柱：カトリック精神基盤の教育

藤女子短期大学保育科は設置目的の一つに「カトリック精神をバックボーンとした教育」を掲げ、一般教育の中にカトリック関連科目が置かれるだけではなく、保育専門科目にもカトリック関連科目を設置した。また、保育科のカリキュラム編成の基礎となった考え方は①専門的職業教育の充実②人間性豊かな幼児教育者育成③宗教教育であり、当時の保育科専任教員に占めるシスターの割合の高さが認められている⁵⁾。

表1 開設当時のカリキュラム

科目名			単位	専門科目	保育学	4
一般教育科目	人文科学	実践倫理	4		小児環境衛生◎	4
		宗教	4		育児看護小児病学	4
		哲学	4		小児精神衛生	4
		文学	2		自然観察	2
		国文学	4		幼児宗教教育	2
		書道	2		幼児家庭教育	4
	社会科学	法学※	4		社会福祉事業	4
		社会学	2		リズム体操遊戯	4
		経済学	4		児童文学	2
		歴史	4		言語指導	4
		生物学	4		保健体育	2
		化学	2		音楽	4
	自然科学	物理学	2		図画工作	4
		自然科学概論	4		教育史	2
外国語	英語	8	教職科目		教育原理	4
	ドイツ語	8			教育心理学	4
体育	講義	1	教育行政法		2	
	実技	1	保育実習	6		
合計 必修 48 単位				選択 86 単位		

※法学（日本国憲法を含む）◎小児環境衛生（被服住居）

一般教育におけるキリスト教関連科目は、保育科の前身である北海道保母養成所以来、牧野キク初代学長による「倫理」が学科目となっており、

以後、カトリック的情操を基盤とした幼稚園教諭養成を行った藤保育専修学校において、さらに短期大学においての「実践倫理」として1970年度まで継続された。この講義は牧野先生によるキリストの精神と、体験をまじえた講義内容であり、後に増設された宗教学と共に本学一般教育の基本的な特色を形作った、とされている⁶⁾。

保育専門科目には「幼児宗教教育」が必修とされ、「保育学」や「保育実習」とともにレニルデ・シュレーデルが担当した。レニルデはシスターであり、藤幼稚園の初代保育者である。

表1は当時のカリキュラムである。一般教育科目は3系列各2科目6単位、計18単位以上、専門科目は40単位以上、体育2単位を含む合計62単位以上履修しなければならなかった。

一般教育科目群の3系列14科目46単位開講とは、短大であったことを考えると量的にも充実したものとなった。このような一般教育科目の充実ぶりは、リベラル・アーツ中心の他学科との関係で、また保育学科の「人間性豊かな幼児教育者育成」の上で欠かせないものであったと考えられる。この目標に関しては次のような記載が残っている。「単に知識を習得させるという方式の教育によってだけでは成し遂げられるものではなかった。たとえ回り道であったとしても、人間がもつさまざまな可能性の中から、自分のうちにある考えや価値観に基づいた選択によって、自然や社会やまた人間自身を探究していき、その選びながらの探究過程で知識を修得していくということも重要になってくる。およそ、人間性を開花させ豊かにしていくための教育であるためには、単なる知識の量的増大がその目的である筈がなく、きわめて人間的な思考過程、つまり探求的で創造的な、選択的な過程がそこに介在していなければならない。知識は伝達者の権力によってだけ伝えられるものでなく、自らの探究活動やゼミ活動等を通して発見的に学び取られていくものでもある。このような知識は、また、現実の問題解決に役立ち、子どもを教え導いていく強い力ともなっているだろう。」⁷⁾

このような考えに基づき、以後、キャンプや宿泊研修、施設見学や実習の充実、器楽教育やゼミによる研究の充実等、学生の学習意欲増進、探求的・発見的学びのためのカリキュラムが編成されていく。

しかし、幼稚園教諭と保育士資格のカリキュラム改正の中で、両免取得のためには短期大学卒業要件の2倍の単位数が必要となり、開講科目の統廃合や単位数削減が図られ、1961年のカリキュラム変更により「幼児宗教教育」は削減を余儀なくされた。

2-4 キリスト教保育と保育者養成

幼稚園の歴史は、1840年にフレーベルがブランケンブルグにkindergartenを創立したことに始まるが、以後、フレーベルの幼児教育思想に深く共鳴したビューロー夫人や教え子シュルツ夫人等幼児教育の必要性を確信した者等の手により、幼稚園禁止令が出された(1851年)当時のプロイセンからヨーロッパやアメリカを経て世界に広がり、日本では1876(明治9)年、東京女子師範学校(現在のお茶の水女子大学)附属幼稚園が創設された。以降、明治から昭和初期にかけて、幼稚園は保育者養成を含め、海外の教会から派遣された宣教師やシスター等によるミッション系の高等女学校の設立と連動し、女子教育と密接なつながりを持って広まっていく⁸⁾。

北海道に現存する最も歴史ある幼稚園は、函館に1895(明治28)年に設立された遺愛幼稚園である。これは1882(明治15)年、アメリカメソジスト監督教会婦人伝道協会によって設立された遺愛女学校に付設された幼稚園である。遺愛女学校は北海道の私学で最も古い女学校である⁹⁾。

このように幼児教育の歴史的背景には私学が果たした役割が大きく、またキリスト教保育の存在も欠かせない。こうした背景は、保育史や保育原理・教育原理の科目で触れる機会はあるが、その理論的背景を学ぶには充分ではない。そのことは、キリスト教を基盤とした保育者養成校の本学にあっても、学生は藤幼稚園・羊丘藤保育園での実習を通してキリスト教保育の実践にふれるが、その理論的背景を十分に理解する機会がないということの意味する。

ところで、保育者養成に着目すると、フレーベルは幼稚園の創立に先駆けて1839年に「幼児教育指導者講習科」を開設して保育者養成にあたり、この学生たちの実習のために設立した「遊びと作業の学園」こそが、後の幼稚園なのである。フレーベルは幼稚園禁止令が出されるまでに70人ほどの保育者を養成し、彼らの手で幼児教育は国内外

に広がった¹⁰⁾。このように、幼稚園設立と保育者養成は草創期から手を携えて発展してきたのである。

北海道の保育者養成校は1960～70年代にかけて短期大学、専門学校で設立が相次いだ。そして、最も歴史のある北星の保育者養成校が1988年に閉校したことにより、キリスト教を基盤とした保育者養成校は本学のみとなり、プロテスタント系の幼稚園からも本学に対する保育者養成の期待が持たれるようになった。

そのような状況で、学科内では、保育の専門と共にカトリック教育の中心を担ったシスターが、1997年、当時の理事長宇山銑子の退職を機に不在となった。

北海道で現存する養成校の中で本学が最も古く、かつ2000年に他大学に先駆けて4年制大学へ改組転換し教育の充実を図った。北海道で最初に障害児保育を始めた保育園での実績を基盤とした特別支援教育カリキュラムを配置した点は、全国的にもユニークで文部科学省から視察も入っている。

以降、本学科の教育理念の確認やカリキュラムの再構築作業の中で、キリスト教を基盤とした保育者養成を今後も続ける本学において、全学科で開講される共通科目群にあるキリスト教関連科目では踏襲しえない、幼児教育の根幹部分を担う科目を学科専門科目群に配置する必要に迫られ、2004年度入学生から保育専門科目として「キリスト教保育」を新設した。3年前期必修科目とし、開講に当たっては、科目担当者をカトリック保育関係者とプロテスタント保育関係者の2名の非常勤講師とした。

3. キリスト教保育の展開と学生の姿勢

本学における「キリスト教保育」は実質的には2006年度より展開され、本年で7年目となる。カトリックの保育関係担当者は、道内のカトリック幼稚園園長に担っていただき、現在は3人目、学校法人旭川カトリック学園羽幌藤幼稚園園長の大長司氏は今年が担当初年度である。

一方、プロテスタントの保育関係者は、日本基督教団安行教会牧師でキリスト教保育園での保育士経験のある田中かおる氏に初年度より継続して担当いただいている。

3-1 講義の目的と展開

(1) 講義目的

キリスト教的人間観に基づいた保育とはどういうものか、また、人格形成の基礎を培う幼児教育はどう在るとよいのか等、心身が調和のとれた成長を遂げられるような幼児教育を目指し、各自が考えていくための材料提供を行う。

(2) 到達目標

- ① キリスト教精神の幼稚園・保育園などへの関心が高まる。
- ② 幼児理解や幼児教育に対する考えを深めたいという意欲を持つ。
- ③ 自分と向き合うことが出来、自己肯定感を持つことが出来る。

(3) 2012年度講義展開

今年度の全15回の講義内容は以下である。

- ① 幼児教育における宗教の役割—日本人の宗教観・北海道におけるカトリック幼稚園の現状理解
- ② 「祈り」について—祈りの定義・カトリック幼稚園での祈り・カトリックの祈り（主の祈り・アヴェマリアの祈り・平和を願う祈り）
- ③ 宗教講話(1)幼稚園での聖書の基本理解・旧約聖書より「ノアの箱船」「バベルの塔」「ヨナ書」
- ④ 宗教講話(2)新約聖書よりイエスのたとえ話編「良きサマリア人」「種をまく人」「見失った羊」
- ⑤ 宗教講話(3)視聴覚教材・ポスター・紙芝居を使って—新約聖書より奇蹟物語編「カナの婚宴」「中風の人を癒す」「5つのパンと2匹の魚」、聖書の登場人物より「ザアカイの話」
- ⑥ 宗教教育の実践—カトリック幼稚園での毎日の祈り・宗教講話・宗教的行事（クリスマス聖劇「イエスの誕生」）の実践紹介
- ⑦ カトリックにおける聖人理解—アシジの聖フランシスコ・コルベ神父・マザー・テレサ（福者）
- ⑧ キリスト教保育とは(1)日本の保育界に与えたキリスト教の影響（幼児教育草創期—女性宣教師たちの働き—）草創期のキリスト教幼稚園、女子教育、キリスト教学校
- ⑨ 聖書における人間観—聖書にみる人間の位置・特質・問題(1)神に造られた人間「天地創造物語」
- ⑩ 聖書における人間観(2)人間の問題「アダムとエバ」

- ⑪ 聖書における人間観(3)人間の問題「カインとアベル」
- ⑫ 聖書における人間観(4)神の救いと約束「箱舟物語」
- ⑬ 聖書における人間観(5)神の導き「ヨセフ物語」
- ⑭ 聖書における人間観(6)神の期待「主イエス・キリストの生涯と教え」
- ⑮ キリスト教保育とは(2)『改定キリスト教保育指針』に学ぶ

大長氏が前期7回、田中氏は道外在住のため夏期集中で8回担当し、それぞれレポートによる評価を行っている。

講義内容を概観すると、カトリックとプロテスタントという視点だけでなく、前半は北海道のカトリック幼稚園の現状や保育現場の実践を具体的に紹介しているのに対し、後半は日本の保育の幕開けとキリスト教の関係を歴史的見地から俯瞰し、女子教育やキリスト教学校にも触れながら、その果たした役割や意義にも触れている。つまり、大長氏は「北海道」「現在」「実践」の観点から、田中氏は「世界と日本」「過去」「意義」という視点から講義展開を行っている。

3-2 キリスト教に向き合う学生の姿勢

前半7回の講義の中で、講義を受けている学生の側に焦点を当て、4回分のリアクションペーパーの記述を基に、学生のキリスト教保育やキリスト教に向き合う姿勢を考察する。

大長は初年度にあたり、受講生のキリスト教理解の程度や、宗教そのものに対する意識をさぐることから始めた。また、保育専攻学生のカトリック幼稚園・保育園の理念の理解については、実際の現場での宗教講話や宗教的行事を通して知ることが重要と考え、豊富な実践事例を取り上げながら講義を進めた。

- (1) リアクションペーパー1：キリスト教に対して

キリスト教（幼稚園）に対する疑問質問

- ・キリスト教徒でなければキリスト教の幼稚園や保育園に就職できないのか？
- ・キリスト教の幼稚園に就職したら絶対に信仰しなければならないのか？
- ・家が仏教なのに聖書のことを子どもに伝えて

も良いのか？

- ・お祈りは無理矢理させるのか？
- ・なぜキリスト教の幼稚園が多いのか？
- ・プロテスタントとカトリックの違いは？
- ・なぜ一信教なのか、いろんな神様がいても良いのでは？
- ・神様はどこにいるの？ 子どもに質問されたらどう答えますか？
- ・信仰していないのに祈りして良いのか？

祈りや神の存在、一神教についてなど、子どもがもつような素朴な疑問や、保育者として子どもの前に立った時のことを想定したもの、自分の進路としてのキリスト教幼稚園についての率直な質問がほとんどで、学生の多くがキリスト教保育に対する知識がなく、キリスト教理解も浅いことが明らかである。

キリスト教幼稚園が多い理由については、歴史的経緯を含め、15回のこの講義の中で回答が得られたものと思われる。

- (2) リアクションペーパー2：お祈り作り

祈りは神との会話であり、賛美・感謝・許し・願いから成り立っていることを踏まえ、今の生活を振り返って祈りを作る課題を与えた。その結果、素直な思いで今の自分の気持ちや願いを表現し、特に、家族や友人等身近な人に対する感謝の気持ち、健康で過ごせることへの感謝やこれからの願いなどが多数を占めた。

自分自身の素直な気持ちから、子どもと共有できる内容を選び、感謝の思いや願いを、子どもにも分かる平易な言葉で綴っている。

お祈りを作ろう

- ・今日も一日優しい心で過ごせますように。
- ・私を生んで育ててくれた両親に感謝します。これからも健康でありますように
- ・時には悲しいこと、辛いこと悩むことがあるけれど、わたしたちにはかけがえのない人がいるから、そして明日があるから乗り越えられます。これからもどうぞみんなのことをお守りください。
- ・自分が周りの人に支えてもらっているように、自分も周りの人の力になれるように。
- ・神様、私はみんなが大好きです。神様、みんな

なも私が大好きです。神様、愛する神様、愛する心をありがとうございます。神様、幸せをありがとうございます。

- 大きな、大きな力の中で、宇宙があって、地球があって、自然があって、人がいます。どれがひとつでも欠けていたら、今の私はありません。神様ありがとう。
- 神様、今日もわたしたちに希望の光を与えて下さってありがとうございます。今日いちにち、わたしたちが安全で健康に過ごせるために、力を与えて下さい。今日もいちにち、見守って下さい。
- 神様、今日も一日無事過ごすことが出来ました。私だけでなく友人、家族、世界の人々が無事に楽しく過ごせました。明日もまた、世界の人々が楽しく暮らせそうですように。

(3) リアクションペーパー 3：命

子どもが虫をつぶす行為は、保育現場ではしばしば見受けられる光景であり、命の大切さを子ども伝える良い機会でもある。多くの学生が、命の大切さを分かりやすく論ずよう記述していた。全ての命は神様からいただいたかけがえのない命であること、虫にも生きる営みがあり、人間と同じ命であることなどが書かれている。また、図鑑や絵本などで虫を取り上げ、命について子どもたちと考える機会をつくるなどの意見もあった。

小さな虫をいじめている子どもに対して一言

- 「虫は、小さくて短い命だけど、虫は虫の役割があって生きているんだよ。虫も人間と同じように命があるものだから、大切にしようね。」
- 「わたしたちも虫も神様が与えてくれた大切ないのちをもっているんだよ。虫の命もわたしたちの命も同じだ。」と伝える。
- もし虫をいじめているのを見たら、「虫さんかわいそうだよ」とか、「家族と離れてかわいそう。」など、虫の気持ちを考えるきっかけになるように声がけをします。
- 教室で、虫をみんなで育てるという活動を取り入れ、生命について考える機会を設ける。
- 一生懸命生きているのはみんなも同じということを伝える。自分がたたかれたりしたら、痛いと同じように、虫も乱暴されたい

いんだということを伝える。

- 虫もみんなと同じで生きている。ありが、一生懸命えさを巣に運んでいるのを見たことない？ ちょうが花の蜜を吸っているのを見たことない？ くもが大きな巣を作っているのを見たことない？ こおろぎがきれいな声で鳴いているのを聞いたことない？ 虫も毎日いろいろなことをしている。外に出て虫たちをよく見てみよう。
- 虫も私たち人間と同じで、生きるために食料を探して、子どもを産んで、一生懸命生きているんだなあと、最近改めて感じます。アリの一匹でも踏んでしまわないように気を付けられる優しい人でありたいです。

近年は、命の大切さを伝えようとする余り、朝、子どもが摘み取って先生に渡そうとしたたんぽぽを、きれいな花を先生にあげたいという子どもの気持ちを汲み取らず、「たんぽぽさんにも命があるんだよ」と返答する新任保育者も出現してきた。本学の学生も、実習先で虫を捕ったり触ったりしている低年齢児に、「虫さん、かわいそうだから放してあげようよ」と言葉がけをする者もいる。一方において、身の回りの自然に触れることなく成長したために、命の実感が伴わず、平気で自然を壊す行動をとる若者も目につく。子どもたちの発達に応じたかわり、生き物の命について、その大切さを実感できるようなかわりを考える機会も、実習等で行われていることを付記する。

(4) アクションペーパー 4：マザー・テレサ

7回目の講義はカトリックの聖人をテーマに、聖フランシスコ・マキシリアノ・コルベ神父とマザー・テレサを取り上げ、マザー・テレサに関するビデオ視聴の後に感想を提出させた。

マザー・テレサについては多くの学生が本を読んだり、高校の授業で取り上げていたり一応の知識はあるようだった。カトリックのひとりの修道女というとらえ方をする学生は少なかったが、生き方や奉仕の精神、活動に共感し、愛の実践者として自身もそうありたいと考える記述が多かった。

マザー・テレサの行動の偉大さ、その背景にある生き方や信条・考え方に感動し、自分にはない強さを感じつつ、今の自分に取り入れられる形で

その考え方を受け入れようとする姿がうかがえる。

マザー・テレサについて

- ・マザー・テレサは、貧しい人たち全てを救おうとしていてその活動が全世界に広がり、全世界の人たちの心を動かしたのだとしみじみ思いました。私は特にプリントの「最後のことはありがとう」という言葉に感動しました。今まで悲しみや怒りのような負の気持ちしか持っていなかった人も、最後に人生で一番温かい扱いを受け幸せな気持ちで天国へ行けるのだと感じました。
- ・マザー・テレサの名前はよく聞くことがあったけれど、キリスト教保育と関係があるとは思っていませんでした。人を愛することや“ありがとう”の気持ちは保育者を目指す者として普段から心がけていたいことだと思いました。子どもたちに大きな愛を持って接することができるようになっていきたいです。
- ・マザー・テレサの生き方や考え方はすごいな、と思うけれど今の満たされた生活を経験していると、全てを捨てる勇氣は持てないと思ってしまう。「自分も痛みを感じないようなものは愛ではない、ボランティアではない」という言葉が印象的だった。見下す気持ち、やってあげている、そういう気持ちが在る限り、愛ではないことを痛感した。日々、色々な悲しいニュースを聞き、自分に何ができるんだろう。何でもかんでも出来ないし…と考えるけれど、目の前の困っている人のために一生懸命になれる人でありたいと感じた。
- ・“今日の最大の病気はハンセン病でも結核でもなく、みんなから見捨てられていること”というプリントの言葉に深く共感しました。人間はやはり一人では生きられない動物だなあと改めて思いました。
- ・マザー・テレサが、「何を行うかではなく、どういう心で行うか」が大切であるということを書いていて、とても印象に残りました。実際にマザー・テレサのような態度や行動を取することは難しいことですが、ちょっとしたことで、マザー・テレサのような心持ちで人と接することは可能だと思います。また、誰もがそういう心を持って生きることが出来れば、人は幸せになれるのではないかと思います。

した。

- ・「目の前で苦しんでいる人を助けるだけ」という考え方に感動した。日本、世界について考えることも必要だけれど私は、自分の目の前にいる子どもに愛を持って接することが出来る保育者になりたい。マザー・テレサのようにとてもたくさんの人に対しては出来ないと思うが、目の前のこと、今を大切にしたいと思う。
- ・本当に心の底からキリストを愛しているのだと思いました。どんな人もキリストに愛されているという考え方は難しいと思うけれど、それを上手に言い換える言葉がすごかった。そう思えば良いのか、どんなに不幸な人でもそれは神によるものだと言えるのかと思いました。私には到底マネは出来ないけれど、その考え方、生き方を少しでも知って、そういう世界があること、そういう人がいたことを心に留めておこうと思います。私にも何か信じられるものがありたいなと思いました。

3-3 子どもと同じ姿勢で

学生の記述から読み取れることは、学生は極めて自然に、幼稚園児のような純朴さでキリスト教に向き合っているということだ。

本学に入学し、1～2年で受講したキリスト教関係科目の知識は、このリアクションペーパーには反映されていない。学生たちのキリスト教的背景は個々に異なっている。中学、高校からミッション系の学校に通った者、わずかではあるがクリスチャンホームに育った者、幼少時のキリスト教の幼稚園・保育園経験者を含めると、数十人となるであろう。そうした背景とは別に、どの学生も子どもと同じ姿勢でこの講義に臨んだと言える。担当者が現職の園長であること、実際の現場での実践事例を用いた講義であったため、学生にとっては教師—学生という関係よりも園長—子どもという関係が意識されたとも考えられる。

この結果から、先に示した講義目的や到達目標のうち、幼児教育に対する考えを深める等の目標には程遠いが、少なくとも学生は素朴なレベルで自分と向き合うことが出来、担当教員は各自が考えていくための材料提供を行うことは出来たと評価される。

4. 学生が子どもに伝えたい聖書の言葉

前半7回の講義終了後、提出を義務付けたレポートの分析を試みた。受講学生76人が取り上げた聖書の言葉と子どもに伝える内容を、聖書の引用箇所によって整理し、学生のキリスト教と子どもに向き合う姿勢の一端を掘り下げる。なお、提出時期は夏期集中講義である「キリスト教保育」後半部も全て終了した時期であり、講義全体が反映されたものと考えられる。

聖書の引用は全て日本聖書協会1987版新共同訳を使用した。

レポート課題：印象に残った聖書の箇所を自分の経験や実生活を通じて子どもたちに伝えるためにどうすればよいか。

出題意図：キリスト教の教えを示す聖書は2000年前に書かれた書物ではあるが、ただの歴史書やユダヤ文学書ではなく、キリスト教の愛の教えを具体化した形で表したものである。保育者として子どもたちに伝える場合、その教えを自分の経験や生活を通して自分の言葉で伝えなければ、ただのイスラエル民族の神話、イエスの伝記としてしか伝わらない。自分の生活を顧みながら神様の愛の計画、イエスの愛の行いを伝えなさい。

4-1 旧約聖書からの引用

(1) 創世記「天地創造」3名

「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった。」(創世記1:31)

神の計画によって造られたものはすべて良いものであるという発想から、子どもたちに自然や動物人間も全てよいものであること、すべて神に守られている存在なので自然を大切にしなければいけない。人間同士も仲良くしなければいけない。

(2) 「アダムとエバ・楽園追放」3名

神は言われた。「お前が裸である事を誰が告げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか。」アダムは答えた。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」(創世記3:11~12)

楽園追放の物語であるが、人間の弱さや傲慢さ、またエバに責任転嫁を図るアダムの姿勢を取り上げて、子どもたちとの日常の関わりから約束を守ること、自分のしたことに対して素直に謝ること、

他人に責任を押しつけないことなどが取り上げられていた。また、蛇の存在を心の声としてとらえ、良心の声(神の声)と同時に内在していることでいつも神に向き合っていることの大切さが表れていた。

(3) 「カインとアベル」3名

さて、アダムは妻エバを知った。彼女は身ごもってカインを産み…(創世記4:1~16)

生活の中でも兄弟げんかや妬みの感情は日常茶飯事ではあるが、この箇所の前段のアベルの捧げ物に対して神の選択については疑問があるものの、カインは神からの呼びかけに対して罪の謝罪をし、神に保護を願う姿勢に命の尊さ、信頼してくれる人の存在を伝えることの必要性が取り上げられていた。

(4) 「ノアの箱船」3名

主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのをご覧になって、地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた。(創世記6~9)

この箱船物語は、旧約聖書の中でも有名な物語で、絵本などでも度々取り上げられている題材である。人間の傲慢さからくる神への裏切りによって、洪水が起こされ世界がリセットされる。しかし、義人ノアは家族と、ひとつがいの動物たちは新しい世界を建設するため助けられる。残酷さを含ませながら、平和の象徴として鳩を登場させ虹を架ける。一昨年東北地方を襲った大震災による、津波が学生の中にも強烈に残っていることが、取り上げた要因にもなっているようだ。

子どもたちに伝える動機としては、神に背いた世界への警鐘や、ノアの一途に神に信頼する姿を取り上げていた。これから関わることになる子どもたちに平和へのメッセージとして、毎日の生活を神に感謝し、信頼して生きることが大切であることが述べられていた。

(5) 「ヨセフ物語」

ヤコブは、父がかつて滞在していたカナン地方に住んでいた…(創世記37~50)

ヨセフ物語は、兄たちからの妬みより、数奇な運命をたどるヨセフが夢を解く不思議な力によりエジプトの宰相にまでなり、ヤコブの家族を救う物語である。

ヨセフの常に神に信頼して生きること、許すことの大切さが書かれている。長い物語ではあるが、ヨセフの生涯は子どもたちにとっても、神様はいつも大きなまなざしで人間を見守ってくれていること、その時々目の見える形ではなく、神の計画があって私たちは導かれていることを伝える。

(6) 旧約聖書の言葉より

- ①「種を蒔くために耕す者は一日中耕すだけだろうか。」
(イザヤ書 28 : 24)

全ての事柄が次へのステップであると考えて。卒園、引っ越しなど別れを伴う場面で、今は、辛い悲しい出来事も楽しい事に向けてのステップであると述べられていた。

- ②「わたしの目にはあなたは価高く、貴く、わたしはあなたを愛し、あなたの身代わりとして人を与え、国々をあなたの魂の代わりとする。」(イザヤ書 43 : 4)

神にとっては一人一人が大切に、ちっぽけな人間の誕生日でさえ、大切に思ってくれている。周りの友人も皆同じで本人だけでなく周りにとってもうれしい出来事である。

- ③「主はこう言われる。上っていくな。あなたたちの兄弟イスラエルの人々に戦いを挑むな。それぞれ自分の家に帰れ。こうなるように計らったのはわたしだ。」(列王記上 12 : 24)

人は生活する中で、自分の意のままにならない事がたくさんある。自然の脅威におびえ、人間関係のひずみで苦悩する。しかし、神は戦うな。それは私の計らいであると言う。その言葉を受け入れる事によって、少し心が軽くなる。私たちは神の御手の中にあるのだから神にゆだねよう。現実を受け入れること、受け入れたときにまた違った喜びもあることを子どもたちに伝えたい。

- ④「どのようなときにも、友を愛すれば苦難のときの兄弟が生まれる。」(箴言 17 : 17)

真の友は苦しい時には、家族以上に親身になって助けてくれる。子どもたちにも友達を大切にすること。信頼して接することの大切さを伝えたい。

- ⑤「見よ。子らは主からいただく嗣業。胎の実りは報い。」
(詩編 127 : 3)

子どもは神様から授かりものであること。また、両親の愛の結晶であること。その子どもたちと接する保育者は、その重みを自覚し、尊敬を持って接するべきである。そして、折に触れ、お父さんお母さんのへの愛情を子どもたちへ伝えていくべ

きである。

4-2 新約聖書からの引用

- (1) イエスの山上の説教 (マタイ 5～7・ルカ 6 : 20～49) 18 名

山上の説教はイエスがガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝えていた。また、民衆のあらゆる病気や患いをいやされた。イエスの評判はシリア中に広まり、多くの民衆がイエスに従った。そこでイエスは山に登られ教えられた。

レポートでは山上の説教の小見出し部分と、イエスのひとつの言葉に対して書かれているものがあるので聖書の流れに沿って分類してみた。

①幸い

「心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである。悲しむ人々は、幸いである。その人たちは幸いである。その人たちは、慰められる…」(マタイ 5 : 3～12)

山上の説教の冒頭に上げられるこの箇所は、集まった民衆に対して、ローマによって支配されている今の立場を、神の国に入るための試練であり、神はそのような境遇の人の中に神の国においては本当の幸せがあることを解いた場面である。

レポートには今の苦しみ悲しみは、後になって幸せにつながる。また、神との関係ばかりでなく人間関係の中で、励まし、思いやることによって自分にも幸せが返ってくる。

子どもたちとの関わりにおいても悲しい事や嫌なことがあっても、見守ってくれる人がいることにより頑張れることを伝えたい。自分の優しい気持ちや行いが、他の子の幸せに繋がることを分かかってほしいと願うことが書かれていた。

②敵を愛しなさい 5 名

「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言っておく、敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい…」(マタイ 5 : 43～48、ルカ 6 : 27～36)

敵を愛することの難しさを痛感しながらも、その中に平和な世界があると信じる気持ちが伝わってくる。自分の生活を見ても、関わりたくない人に対して愛を持って接することの大切さが多く述べられていた。人間関係の希薄な世の中であって、愛の大切さを保育者として子どもたちの関わりの中で、けんかや物の取り合いなどの場面などで、人を許す心、分け合う心を育てていくことが大切であるという言葉が多く述べられていた。

存在であり、まわりの子にとっても仲間と思えるように伝えたい。

(4) 最も重要な掟 2名

イエスは言われた。『心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の掟である。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。』（マタイ 22：34～40、マルコ 12：28～34、ルカ 10：25～28）

イエスに対して律法の専門家が試みようとして尋ねた箇所であり、その答えは、新しい掟ではなく、ユダヤ教徒として今まで守ってきたものだった。ただ、第二の掟の隣人を自分のように愛する部分にあってはルカ書が「善いサマリア人」（ルカ 10：30～37）のたとえ話で説いているとおりである。

レポートには神との関係を人間関係と置き換え「心を尽くし、…」を相手に対して誠心誠意向き合うことの大切さが述べている。また、子どもたちへは「友達を大切にする」相手を思いやるなどの対応を保育者自らが実践することが大切であることが述べられていた。

(5) 「良いサマリア人」のたとえ話 16名

イエスがお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、追いはぎに襲われた…（ルカ 10：25～36）」

今回のテーマの中で一番多く取り上げられていた聖書の箇所で、イエスと律法学者とのやり取りから、永遠の生命を得るために必要な事として、「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くしてあなたの神である主を愛すること。また、隣人を愛すること。」と言ったイエスに、ではわたしにとって隣人は誰かという問いに対してたとえを使って話された部分である。

キリスト教の隣人愛について誰でも分かりやすく解説しているため、取り上げた学生も多かったと思う。

現代人が抱えている相互扶助の欠如、差別や偏見を持った社会がもたらされる希薄な人間関係をこの箇所からくみ取っているのだと思う。私たちが、祭司やレビ人ようになってはいないか。自分の生活を反省しながら、サマリア人のようになりたいと願う姿勢が見えた。また、大震災

によって見直された絆の大切さ、自身の助けられた経験、路上生活者や障がい者の現実なども見つめながら「私にとって隣人とは」という問いから「目の前にいる人の隣人となれるのは」に代わっていくことの大切さが浮き彫りになっていた。子どもたちには、「隣人愛」「無償の愛」の実践はキリスト教の教え、聖書のたとえ話としてだけではなく、幼児期より日常の生活の中で伝えていかなければならないという意見が多かった。

(6) 罪人を招くため

「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」（マルコ 2：17）

イエスが徴税人や罪人と一緒に食事をしているのを見て、ファリサイ派の律法学者がイエスの弟子に言ったのを聞いたイエスの言葉。ユダヤの国は当時ローマの支配下にあり、ローマに納める税金を集める徴税人は、嫌われていた。罪人とは律法に規定に反する仕事や異邦人と呼ばれる人々であると思われる。

イエスは憐れみ深い人で、国籍や人種、職業を超えていつも、救いを求める人に優しく接してくれる。私たちもどんな人でもありのままを受け入れる人になりたいと思う。

(7) 子どもを祝福する

イエスに触れていただくために、人々が子どもたちを連れてきた。弟子たちはこの人々を叱った。しかし、イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。「子どもたちをわたしのところに來させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言うておく。子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」そして、子どもを抱き上げ、手を置いて祝福された。（マルコ 10：17～31、マタイ 19：13～15、ルカ 18：18～30）

イエスは子どもをかわいいとか愛らしいなどの次元で祝福されたのではなく、神の国はこのような、小さき者達のものであり、権力や地位の高い人たちのものではない。子どものような素直な心、受け入れるだけの存在の者に神はお恵みを下さる。子どもたちには「神様の国ってどんなだろう？」という問いかけから想像をふくらませ、「立派な大人だからいけるのではなく、お祈りをしたり、善いことをして神様を喜ばせる人はいけるよ。」と伝

える。

(8) 律法に勝ること

「あなたたちに尋ねたい。安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、減ぼすことか。」(ルカ 6：9～11、マタイ 12：9～14・マルコ 3：1～6)

ユダヤ教の安息日の規定は厳しく仕事はもちろん家事や出掛けることも禁止されていた。その中で、イエスは手の萎えた人をいやす行為を行い、律法学者たちに詰め寄られる。

聖書の言わんとしていることは、善や命を救うことは、律法に勝るということであるが、レポートを見ると言葉の言い回しに着眼し、挫折や困難なことに悔やむより、前向きに生きることを心がけたい。また、別な言い方をすれば、人に何かを頼まれたとき文句を言いながらするのと、喜んでするのかでは人生が変わる。子どもたちにも、人に喜んでもらうことをすることで自分も楽しくなれることをこの言葉で伝えたい。

(9) 「放蕩息子」のたとえ

「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください。』と言った…」(ルカ 15：11～32)

キリスト教の幼稚園や保育園でよく話される箇所、神のどこまでも深い慈しみを、この父のような存在として取り上げられる。

レポートでは、自身の家族(姉妹)の同じような経験から、兄への共感がこの聖書を読んで、父(神)は同じように私も愛してくれていた。その愛に気づかされたという感想を述べている。子どもたちには「一人一人が大切にされている喜ばれる存在」であることをテーマに、弟の気持ち、兄の気持ち、お父さんの気持ちを聞き、神は全ての人を大切に思ってくれていることを伝えたい。

(10) 誘惑を受ける

「四十日間、悪魔から誘惑をうけられた。その間、何も食べず、その期間が終わると空腹を覚えられた。…イエスは、『人はパンだけで生きるのではない。』と書いてあるとお答えになった。」(マタイ 4：1～11、マルコ 1：12～13)

イエスが公生活(伝道)に入る前、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受け、四十日の断食の中で悪魔に誘惑された箇所。

レポートには中学・高校生時代に初めてこの箇所に出会い、ただ単に衣服や他の食べ物と考えていたが、それは、「愛」であると気づき、愛のない生活は、身体は生きていたとしても、心が愛に満たされていない状態で、生きる価値がないと思う。

子どもたちには、この箇所を聞かせ、何が必要かを問いかける。お母さんが作ってくれる食事や、衣服や住まいなどには関わる、たくさんの人の愛によって成り立っていることを伝える。友達同士もお互い愛することによって仲良く遊べる事を伝え、愛が大切で、なかったらつまらないと、感じるように日頃の関わりから学ぼう指導する。

(11) 神の存在

「神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と心理をもって礼拝しなければならない。」(ヨハネ 4：24)

祈る態度を実習園の子どもたちの態度から学び、祈りは自由に時には歩きながらも出来るが、心を神に向けるために目を閉じ、姿勢を正し、手を組み合わせて祈ることにより、身近に神の存在に気づき本来の祈り(神との会話)になっていくと思う。

保育の中で祈るという場面があったときには、同じようにひとつひとつの所作の意味を伝えながら、態度も祈りのひとつであることを伝える。

(12) パウロの書簡より

「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを、希望はわたしたちを欺くことはありません…」(ローマの信徒への手紙 5：3～5)

自身の中学の部活の体験から、「努力は自分を裏切らない。」という顧問の先生の言葉と苦難の後には希望があるという、聖書の言葉を引用し、何事も苦しいことに逃げ出さず成し遂げるところに成功や希望があるとしている。

保育の場面では、自立するための援助として、生活習慣でも、行事などの練習でも最後まで頑張ること、寄り添いながら励ますことが大切であることが述べられている。

(13) キリスト教的生活の規範 3名

「愛には偽りがあってはなりません。悪を憎み、善から離れず、兄弟愛をもって互いに愛し、尊敬をもって互いに優れた者と思いなさい…」(ローマの信徒への手紙 12：9～21)

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。」(同 12：15)

この言葉に対して受験勉強を一緒にした友人との時間や、オリンピックでの選手の活躍に想いを一つにし、一緒に時間を共有し、時には笑い、時には涙したことが、とても貴重な時間だった。人間には人より優れていたい、偉くなりたいという欲望があるが、そのために共感する気持ちが失われることは、とても残念なことで、いつも共に喜び、共に泣ける感性を持ちたい。幼児との関わりの中では言葉で伝えるのではなく、一緒に生活する中で、体で、経験で、心で伝えていきたい。他者への思いやりや優しさを育むことで、聖書に書かれている愛のある人間へと成長できると思う。

(14) 自分ではなく隣人を喜ばせる

「わたしたち強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません…」(ローマの信徒への手紙 15：1～6)

喜びを共有することのすばらしさを感じながら、他者への思いやりが人間関係の中にあっては必要で、お互いが成長することによって始めて喜ぶ事ができる。

保育者として、子どもたちは勿論、保護者と一緒に子どもの成長を願い、接することが大切である。

(15) 偶像への礼拝に対する警告 3名

「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずだ。神は真実な方です…」(コリントの信徒への手紙 10：13)

学生という身分の中にあっては、試験やレポート提出は試練ではあるが、これからの人生の中で、後になって考えると大きな問題ではなかったことに気づくと思う。後半の「試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道を備えてくださる。」という言葉に励まされながら、逞しく生きてけたなら良いと思う。子どもたちに伝えることはそう簡単な事ではないと思うが、「神様は、自分にとって一番大切な試練を与えてくれているんだ。」ということ生活の場面などで、伝えて生きたい。

(16) 愛 2名

「そこで、わたしはあなたがたに最高の道を教えます。たとえ人々の異言、天使たちの異言を語ろうとも、愛がなければ、

わたしは騒がしいどら、やかましいシンバル。たとえ、預言する賜物を持ち、…」(コリントの信徒への手紙 13)

愛はとても大切であり、どんな完璧な人がいたとしても愛がなければ、薄っぺらな人間と思う。まわりの人に愛を持って接することによって、心が豊かな生活が出来ると思う。子どもたちにとっても、愛があふれる環境で過ごすことは、人格形成の上でも大切なことである。そのためには、まず保育者が子どもたちに愛を持って寄り添うことが重要である。子どもたちには愛といっても理解できないと思うので、相手の気持ちになること、優しさや、思いやりといった行動ができるよう指導したい。

(17) 神は愛

「愛する者たち、互いに愛し合いましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです…」(ヨハネの手紙 4：7～12)

愛は支え合いだと思う。人はまわりの人に支えられながら生きていることを理解し、お互いを尊重するべきである。全ての人は必要な存在として生まれているのに、最近は、支え合いから反した「いじめ」が、貴い命も脅かしている。あるがままの自分を認められ、愛される事は心が健康で成熟した大人になるのに必要なことです。保育者として、まず、自分が子どもたちに大好きだよと、心から言ってあげること、行動で示すことによって、幼稚園や保育園に来れば、安心感がもてることを実感し、そこから人との繋がりの中で、支え合うことが大切あることに気づくと思う。

4-3 人間としての自身の探求と子どもを支える力

学生の取り上げた聖書の言葉は、旧約聖書から 10 箇所、新約聖書から 22 箇所、合計 32 箇所からの引用となった。それは、講義で印象に残った言葉だけでなく、自身が深く感動し励まされた言葉や子どもに伝えたい生き方でもあった。

また、その言葉の理解は、神の存在やキリストの教えそのものにダイレクトに接近するというよりは、自身の日常生活やこれまでの経験の中から理解し得る範囲に留まっていると考えられる。例えば、神の存在や神から与えられた命については、神というよりも人間ではない大きな存在に見守られていること、自分だけではなく、他者も他の動

物もかけがえの無い命として平等であること、だから友達も自然も大事にしよう、与えられた命に感謝して生きよう、との記述になっている。

そのような理解から、支えられながら生きていくことへの感謝や親への感謝、友達への思いやり、共感し励まし合い、人を受け入れ、許し、愛されているから仲間を愛そうといった望ましい人間関係のあり方として子どもに伝える内容となっている。祈りについても、神からの愛にこたえようとする感謝の気持ちや神に対する信頼ももちろんあるが、人間ではない大きな存在に対する素朴な感謝や祈りとして、子どもに伝えようとしている。

特に注目したいのは、辛い苦しい出来事や試練に対する自身の経験と、そのような状況下での現実を受け入れる姿勢や、逃げ出さないで最後まで頑張る等の心の持ちようや向き合い方についての記述である。一番大切な試練を与えられているのだ、これ乗り越えた後に幸せがやってくる、見守ってくれる人がいるから頑張れる、前向きな姿勢で、といった記述が多く、子どもに伝えるというよりは、自身の直面している困難を直視し、聖書の言葉に励まされ救われながらたくましく生きようとしている姿が浮き彫りとなっている。

このような困難な経験は、自身の実生活を通して経験した人間形成のそのものであり、聖書の言葉を通して自身と向き合い、人間として問いかけることは、子どもの人間形成を支える実践力となっていく大事な一歩ではないだろうか。

今後の課題として、以下の点の改善があげられる。課題提示が最後の講義時となり、しかも口頭での提示になったことにより、レポートは「印象に残った聖書の言葉の解説や根拠」に重点が置かれ、保育現場で子どもにどう伝えるかという部分が、手法の解説になってしまっており、出題意図が正確には伝わらなかった。

しかし、聖書の言葉が心に響き、保育者を志す者として、保育の中で生かしていきたいと考える学生が多くいたことは、今後、聖書の言葉が生かされうることが示唆され、出題意図の一端は伝わったと判断される。

講義時のリアクションペーパーと異なり、1年次からのキリスト教関連科目での学びや、「キリスト教保育」の後半部分も生かされた内容であった。

5. おわりに

子どもの人間形成を支える保育者には、知識や技術だけではなく、人間性が求められる。人間としての自身を探究していく過程で得られた知識は、現実の問題解決に役立ち、子どもを支える実践力となる。

カトリック精神の本学科で保育者を目指す者には「キリスト教保育」履修が義務付けられている。それは、聖書を通して神の言葉に耳を傾けながら、人間としての自分と向き合い、子どもを支える保育者としての自分を形作る作業の始まりと言えるであろう。

引用文献

- 1) 『北星学園百年史通史篇』1990年、608-633頁。
プロテスタント教育を基盤とした北星女学校は、その前身であるスミス女学校を1887年に開設したが、同時に付属幼稚園を開設、これは札幌で最初の幼稚園であり、全道でも函館師範学校付属幼稚園(1883年)、私立函館幼稚園(1887年)に次ぐものであり、いち早く保育者養成を行った。
- 2) 『北私幼二十周年記念誌』1990年。
- 3) 小樽藤幼稚園(1934年)、札幌藤幼稚園(1938年)、函館藤幼稚園(1950年：1934年ドミニコ幼稚園として創設、初代園長レミュー神父から3代、6年間外国人神父により経営されたが、1941年第一次世界大戦勃発により神父がスパイ容疑で拘置、実刑となりカナダに強制送還されたため日本人神父により引き継がれたが、1945年休園、1946年白百合幼稚園として保育再開、その後札幌マリア院より派遣された3名のシスターにより1950年より改称して経営を引き継ぐ。)
- 4) 旭川藤幼稚園(1954年)、青森藤幼稚園(1955年)の開設も控えていた。
- 4) 『藤女子短期大学30年、藤女子大学20年記念誌』1980年、60頁。
- 5) 本学保育学科の実際の学問・技術とカトリック精神による人間教育については下記に詳細を記した。吾田富士子著「戦後の北海道における保育者養成と実践養育——奥田三郎・稲垣是成・留目金治の実践と羊丘藤保育園設立の経緯から——」(『藤女子大学紀要第II部』第47号所収)2010年、61-73頁。
- 6) 『藤女子短期大学30年、藤女子大学20年記念誌』1980年、90頁。
- 7) 同上、62-63頁。
- 8) 小林恵子著『日本の幼児養育につくした宣教師

- 上巻』キリスト新聞社，2003 年。
- 9) 『平成 12 年度函館私学研究紀要（幼稚園編 17 号）特集 道南三地区（函館・渡島・檜山）における全幼稚園発展小史年表』函館私学振興協

- 議会・函館私立幼稚園連合会，2000 年。
- 10) 荘司雅子監修『写真によるフレーベルの生涯と活動』玉川大学出版部，1982 年。